

著者を  
たずねて

3

すべての人の  
きぼうを伝える

## 山本雅基さん

### 『東京のドヤ街

### 山谷でホスピスやっています。』

実業之日本社（じっぴコンパクト新書）

困っている人を助けることは  
ずっと当たり前だった

東京の台東区と荒川区にわたって山谷と呼ばれる一区画がある。通称「ドヤ街」。日雇い労働者が滞在する簡易宿泊施設（「ドヤ」）が集結し、ドヤに泊まらない者はアーケード街で夜を過ごす。現在、この地区の路上生活者の数は3500人に達するといわれる。

その山谷で、余命いくばくもない路上生活者に「最期の場」を提供し続けている人がいる。山本雅基さん、在宅ホスピスケア「きぼうのいえ」の創立者であり、施設長だ。

難病をかかえながら、家も身内もない、そんな人たちが無料で受け入れて8年。

「小さいころから捨て犬さえ見捨てられないような子どもでした。困った人がいると放っておけない。そのまま大人になってしまったのですかね」と、こともなげに語る山本さんの人

生は波乱に満ちている。大学時代、病院でのボランティア中につづ病を発症。苦しい闘病生活を経て、進むべき道について何年も悩んだ末、路上生活者のために力を注ぎとうと決心した。

「私が病気を乗り越えられたのは、親の助けのおかげでした。子どもは親の愛、慈しみを受けることができるものです。でも友人や親戚のいない孤独な人、どこにも行き場がない人がいるのも事実なのです」

学生のころ、道端で出会った路上生活者の男性を自分の下宿先に連れて帰り、2週間ほど同居したこともある山本さん。生活保護の手配をし、食事や風呂を提供した。

「ふとしたときに彼が寂しそうな表情を見せるようになったのです。その理由がわからなくて、考えていたある日、突然彼は黙っていなくなりました。数日後、都内の病院から保護していると連絡を受けて、面会に行ったとき、ソーシャルワーカーの方に言われたので



庶民が建てた庶民のためのホスピスの、涙と笑いに満ちた8年間の記録。生きることと看取り、祈りと希望をテーマに、山本さんとスタッフの奮闘を描く。1月に公開された映画「おとうと」に登場するホスピスのモデルとなり、注目を集める。



す。あなたは道路で寝ることができ  
る？ 本心に寄り添いたいならば、相  
手を自分の領域に引き込むのではなく、  
あなたが相手の生活基準に視線を合わ  
せなきゃ。衝撃的でした」

それなら彼らの拠点でホスピスを始  
めようと一念発起。当初は資金面での  
苦勞や地域住民からの反対、スタッフ



山谷という小さな街を  
ホスピスの聖地サンクチュアリにしたい

体制の不備など前途多難なスタートであった。そんなとき、夫人の美恵さんをはじめ、誰かが手を差し伸べてくれたという。

「まったく先が見えない洞窟の中のような日々でした。周囲から、無謀のいえと揶揄されるのも仕方なかったですね。しかし、ここ数年で社会の風向きも良い方向に変わっています。つい先日、新しいプロジェクト(※)が始まって、補助金がもらえるようになったのです」

「死を待つ人の家」を目指して  
山谷をホスピスの聖地サンクチュアリに

入居者は平均して30名、これまでに看取った人は110名に及ぶ。

「私は医者ではありませんから医療を施すことはできません。ただ、残りの人生を新しく生き直す場を提供するだけです。そのために必要なのは人。ここはしっかり生きて、しっかり死んでいく、そんな場所です。マザー・テレサが死を待つ人の家を建て、インド

のカルカッタをホスピスの聖地サンクチュアリにしたように、山谷という小さな街全体でホスピスを行っていきたい。これから数年経てば、受け入れる対象も随分変わってくると思います。ネットカフェ難民などの社会的弱者がもれません。そのとき、彼らをどう受け入れるか、これが今後の課題です」

常に自分よりも他人のことを優先してこまできた。「山谷サンクチュアリ」も遠い夢ではないかもしれない。

撮影/片桐 圭

やまもと・まさき

1963年、東京都生まれ。「きぼうのいえ」施設長。85年、日航機墜落事故のニュースをきっかけに聖職者を志し、95年上智大学神学部を卒業。「NPO法人ファミリーハウス」の事務局長を経て、2002年10月にきぼうのいえを設立。

※東京都の「少子高齢化時代にふさわしい新たな『すまい』実現プロジェクトチーム」が主催する事業。